

既婚女性ネットユーザーの日常コミュニケーション—日誌調査をもとに

磯村陸子(お茶の水女子大学人間文化研究所) 大谷裕子(フリーランスライター)

新垣紀子・野島久雄(NTTコミュニケーション科学基礎研究所) 無藤 隆(お茶の水女子大学生活科学部)

インターネットを日常的に利用している43名の既婚女性を対象に、インターネット利用に関する一週間の日誌調査を実施した。調査では、インターネット上の活動だけでなく日常生活の人間関係やコミュニケーション全体を対象とし、またネット利用に関する事実だけでなく、ネットコミュニケーションを通じて彼女たちが何を感じているのかについても検討した。その結果、既婚女性というユーザー層の属性や生活背景を反映したネット利用の形態として、ネットの内と外とが断絶した利用の形態ではなく、家庭との両立や日常生活との連続性を保った形での利用を行っているという連続性仮説が支持された。また、このような利用実態に関わるネット利用と心理的要因との関連も見出された。

Communication In and Out of the Internet – Diary Survey on the Internet Use by Married Women

Rikuko Isomura (Ochanomizu University) Yuko Ohtani (Freelance Writer)

Noriko Shingaki, Hisao Nojima (NTT Communication Science Laboratories) Takashi Muto (Ochanomizu University)

Authors conducted a research on daily Internet use by married women. Forty-three married women using Internet were asked to keep diaries on their Internet use for one week. The diaries were also designed to include information on face-to-face and telephone communication other than on-line communication such as electronic mails. Detailed analysis of the diaries suggests that the Internet use by the subjects is characterized as follows: 1) continuity or commonality between on-line and off-line communication, 2) priority of family life over the Internet use. No significant relationships were found between degree of the Internet use and negative psychological variables among these users.

I. 本調査の目的

インターネットの個人利用者の増加に伴い、今後社会がどのような変化を経験することになるのかという問題に大きな関心が寄せられている。中でも、インターネット利用が利用者の人間関係や内面にどのような影響を及ぼしうるのかという問題は最も関心を集めているテーマであり、ある程度大規模な調査も行なわれてきている(e.g., Kraut et al., 1998)。しかし、これらの調査の多くは、インターネットを利用すること、もしくは「どの程度」利用するかが、ネット外の人間関係や精神的健康に、どの程度「害をおよぼしうる」のかという視点から行なわれており、「誰が」「どのように」インターネットを利用した上での心理的影響なのかという点が十分に議論されているとは言いがたい。たとえば、過去の利用実態調査に示されているように、個人利用者にとってインターネット利用の大きな目的の一つはコミュニケーションであるが(郵政省, 1999)、インターネットを介してなされているコミュニケーションの相手や内容にはほとんど注意が払われてきていない。また、コミュニケーションを含め、ネット上でなされる活動がもつ影響力を考える上で、利用者の生活全体から見てそれらの活動がどのような意味・価値を持つのか、どんな生活背景のもとで利用されているのかにより、電子メールをはじめとするインターネットサービスの利用に関わる心理的要因も異なるはずである(佐久間, 1999)が、この点についてもあまり考慮されていない。

このような、「誰が」「誰と」「どんな」活動を行ったのかという視点の欠如は、「バーチャルとリアル」という対比に代表されるような、ネットの内と外という単純な二分法を前提としていることによるものであるように思われる(Kraut et al., 1998; 大谷, 1999; Mantovani, 1996)。しかしこの二分法は果たして全ての利用者にとって本当に有効なのだろうか?

そこで本調査では、ネットを日常的に利用している既婚女性を対象に、ネットの内と外とのやりとり相手の重なりや、他のコミュニケーション手段との関連、日常生活との関わりという観点からインターネット利用、主にネットを通じたコミュニケーションの実態調査を行った。既婚女性は、従来の調査で

対象とされることの多かった学生や仕事を主目的とした利用者とは異なり、比較的家庭を中心とした生活を送り、またそれゆえの時間的な制約もある中でネットを利用している。このような特徴は、ネットの内を外の生活と断絶したものとして利用するよりは、2つを連続した、調和的なものとして利用するように働くのではないだろうか(連続性仮説)。調査の方法には、日常生活のコミュニケーション全体を記録し、生活サイクルの中にネット利用を位置付けられる方法として、日誌法を選択した。また誰とどんな内容のコミュニケーションがなされたかという事実に関する記録だけでなく、コミュニケーションに伴った感情や重要性等、これまであまり検討されてこなかった利用者にとっての主観的意味についての検討も試みた。

II. 方法

対象：インターネットを毎日のように利用している既婚女性という条件で募集した43名

参加者のうち、39名はNifty Serve子育てフォーラムの掲示板を通じて募集、4名は以前に行なわれたメディア利用に関する質問紙調査の参加者に対し、電子メールを送付して募集した。参加者の平均年齢は32.0才(26才～39才)、約半数(25名)が専業主婦、その他の18名はフルタイム勤務(2名)を含めパート・アルバイト等、何らかの形で職業を持っていた。子どもの数の平均は1.6人(0(2名)～4名)、末子の平均年齢は、2.4才(0～8才)であった。電子メール利用歴は平均46.6ヶ月(4～114ヶ月)であった。

方法：次の3種類のデータを収集した—ネットコミュニケーションを含む、毎日のコミュニケーション活動に関する『日誌』、『日誌』に記録されたやりとりの相手に関する『やりとり相手質問表』、人間関係に関する項目等からなる『アンケート』

- ・『日誌』には、一日のメール・掲示板等での発言・対面での会話・電話での会話について、それぞれのやりとりの相手・内容・感想、ネットに費やした時間、電子メール以外の活動、一日のうち心に残ったやりとり等について記入を求めた。一日一回電子メールにより調査者が参加者宛に送付し、その日一日分の記録を記入した上で毎日返送してもらった。やりとりの内容、感想等、『日誌』の記入項目の多くは選択肢からの選択式を採用した。実際のデータ収集に先立って、記入のためのマニュアルを郵送した上で、一日分の『日誌』に予行練習として記入を求め、調査者がチェックした上で訂正点等を伝えた。
- ・『やりとり相手質問表』は、知り合ったきっかけ、電話・携帯電話・電子メール等の各メディアによる連絡頻度、相手に感じている親しさ、等の項目からなり、日誌調査の開始以前に調査への参加マニュアルとともに郵送し、日誌調査終了後、記入の上返送してもらった。
- ・『アンケート』は、属性に関する項目、メディア利用実態に関する項目、人間関係に関する項目からなる。人間関係に関する項目は、佐久間ら(1999)、大谷ら(1999)で使用された、孤独感尺度20項目(改訂UCLA孤独感尺度(Russel & Cutrona, 1980))、及び、夫・親友・母親との間のソーシャルサポート各15項目(嶋(1991)を参考に作成)からなる。日誌記入の終了後参加者に対して郵送し、記入の上返送してもらった。

III. 結果

1. メディアごとのコミュニケーションの特徴

電子メール、フォーラム等での発言を含めた電子コミュニケーションの一日の平均件数は、受信が平均3.69件(SD=5.70)、送信が平均1.96件(SD=1.93)であった。対面会話は、ある程度まとまりを持った会話を一件として記入を求めた結果、一日の平均件数は6.20件(SD=3.94)であった。電話は一日平均1.59件(SD=1.10)が記録された。

それぞれのメディアで一週間の間に一度でもやりとりがあった相手を、『やりとり相手質問表』の記述をもとに、TABLE 1 下の16のカテゴリーに分類した。一人当たりの平均人数をTABLE 1に示す。

電子コミュニケーションを通じて、ネット上で知り合った相手だけでなく、学生時代の友人や、比較的頻りに顔を合わせている可能性の高い家族の関係・近隣の知り合い等、幅広い種類の相手とやりと

TABLE 1 一週間のやりとり相手構成(メディア別)

	f	a1	a2	a3	a4	a5	a6	b1	b2	b3	b4	b5	b6	c1	c2	c3	c4	計
電子コミュニケーション(全体)	0.23	0.28	1.12	0.98	1.00	0.63	0.09	0.81	0.53	0.53	0.98	0.40	0.12	1.35	0.74	0.63	0.58	11.00
対面会話	1.77	1.42	7.02	1.49	0.19	1.02	0.98	0.00	0.00	0.00	0.05	0.02	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	13.95
電話	0.58	1.77	2.14	0.86	0.44	0.51	0.47	0.00	0.05	0.02	0.02	0.02	0.05	0.00	0.00	0.00	0.00	6.93
参考：電子コミュニケーション(受)	0.23	0.19	0.93	0.86	0.84	0.58	0.07	0.65	0.35	0.53	0.79	0.37	0.09	1.37	0.42	0.33	0.56	9.16
電子コミュニケーション(送)	0.12	0.23	0.95	0.63	0.88	0.37	0.07	0.58	0.47	0.44	0.88	0.21	0.05	0.23	0.74	0.63	0.02	7.51

a ネット外での知り合い	b ネットを通じて知人	c ML/フォーラム/HP
f 同居している家族	b1 子育て関係の場を通じて	c1 メーリングリスト
a1 同居していない家族・親戚	b2 友達づくりの場を通じて	c2 フォーラム
a2 家族の関係・近隣の知人(例：幼稚園ママ)	b3 仕事	c3 ホームページ
a3 職場・元職場関係	b4 趣味・関心事関係の場	c4 メールマガジン
a4 学生時代の知り合い	b5 互いのHPを通じて	
a5 趣味・関心関係(例：テニスサークルの仲間)	b6 その他	
a6 その他		

りをしていることが明らかになった。ネットを通じて知り合った相手だけ、ネット外の知り合いだけと、やりとりをしていた人は、それぞれ5名、6名であり、それ以外の約7割の人はどちらの種類の知り合いとも電子メール等のやりとりがあった。

対面の会話や電話では、やりとりの相手は、同居・非同居の家族や、家族・近隣の知り合いに集中している。家族・近隣の知り合いの多くは、小学校や幼稚園等、子どもを通じて知り合った母親友達であった。また、わずかながら調査期間中にネット上で知り合った相手と会ったり、電話で話したりした人もみられた。電子メールを含めた電子コミュニケーションは、新しい人間関係を広げる場としてだけでなく、電子メールを利用しはじめる以前からの知り合いや、比較的良好な顔を合わせる相手とのやりとりにも積極的に利用されている。またネットを通じて知り合った相手と実際に顔を合わせたりといったこともわずかではあるが行なわれており、ネットだけで完結した形では利用されておらず、むしろネット外での生活との連続性を保ちながら利用されていることが示された。

電子コミュニケーションのうち、受信分については、一つ一つのやりとりに関して、受信したメッセージをどうしたか(受信後の行動)について、送信分については、送信の動機について記録を求めた。その結果、受信後の行動のうち、ネット外の知り合いからのメールについては7割ほど(63.9%)、ネットを通じて知り合いからのメールについては5割弱(45.1%)について「返事した」と記録されていた。送信の動機については、調査期間中に参加者が送信したメッセージの約7割ほど(71.3%)が受信したメッセージに対する返事として送信されたものであった。この結果は、参加者とやりとりの相手との間で、ある程度継続したメッセージの往復がなされている可能性を示唆している。またわずか10%程ではあるが、ネット外での知り合いから受け取ったメールを、家族や他の人との間の話題にしていたことも明らかになった。

2. やりとり相手ごとのコミュニケーションの特徴

それぞれのメディアを通じて、どのようなやりとりがなされていたのだろうか。やりとりの内容とその感想として多く選択されたものをメディア別にまとめたものがTABLE 2-1, 2, 3, 4である。

・電子コミュニケーション：ネット外の知り合いでは「近況報告」が多いが、ネット上の知り合いとの間でも「近況報告」や、「悩み事、グチ」等の個人的な内容がやりとりされている。また相手にかかわらず、特に送信分で、「気遣い・アドバイス」が多くみられたこと、メーリングリスト等、不特定多数の人が参加している場で、「悩み事やグチ」等が比較的多くみられたことから、ネット上でできた人間関係の中で、心理的なサポートとなるやりとりがなされていることが示された。やりとりの感想としては、個人相手とのやりとりでは、「うれしかった」「楽しかった」という肯定的な感想が多くみられた一方で、「ほっとした」という感想も多くみられた。また、メーリングリスト等では「特になんとも」という感想が最も多く選択されているが、これは受信分には企業等から送られるメールマガジン等が多く含まれているためであると思われる。その一方で「共感した」という感想も比較的多く選択されていた。知り合いとのメールのやり

とりで近況を知らせあうことでほっとしたり、関心を共有する人々が集まるメーリングリスト等の場でやりとりされるとりとめのない話題や悩み事等に共感している様子がうかがわれる。また送信に伴った感想として「スッキリした」が多く選択されており、知り合いや関心を共有する人々に対し、メッセージを書くことで、ポジティブな心理的効果がもたらされている可能性が示された。

TABLE 2-1 やりとり相手ごとの内容と感想(電子コミュニケーション受信分)

	f 同居家族		a ネット外の		b ネット上の		c MLなど	
	内容	件数 (%)	内容	件数 (%)	内容	件数 (%)	内容	件数 (%)
1	近況報告	8 (50.00)	近況報告	100 (40.98)	事務的連絡	73 (40.11)	とりとめない	341 (51.05)
2	事務的連絡	7 (43.75)	事務的連絡	77 (31.56)	近況報告	58 (31.87)	事務的連絡	87 (13.02)
3	気遣い・アドバイス	3 (18.75)	とりとめない	71 (29.10)	とりとめない	46 (25.27)	悩み事・グチ	74 (11.08)
4	とりとめない	2 (12.50)	気遣い・アドバイス	39 (15.98)	気遣い・アドバイス	30 (16.48)	気遣い・アドバイス	65 (9.73)
5	悩み事・グチ	0 (0.00)	悩み事・グチ	14 (5.74)	悩み事・グチ	15 (8.24)	近況報告	34 (5.09)

	f 同居家族		a ネット外の		b ネット上の		c MLなど	
	感想	件数 (%)	感想	件数 (%)	感想	件数 (%)	感想	件数 (%)
1	f ほっとした	7 (43.75)	c うれしかった	95 (38.93)	c うれしかった	82 (45.05)	o 特になんとも	292 (43.71)
2	c うれしかった	4 (25.00)	a 楽しかった	75 (30.74)	a 楽しかった	39 (21.43)	a 楽しかった	199 (29.79)
3	n 心配になった	3 (18.75)	f ほっとした	47 (19.26)	f ほっとした	28 (15.38)	g 共感した	159 (23.80)
4	o 特になんとも	2 (12.50)	o 特になんとも	34 (13.93)	f ほっとした	27 (14.84)	h つまらなかった	94 (14.07)
5	a 楽しかった	1 (6.25)	g 共感した	23 (9.43)	o 特になんとも	21 (11.54)	c うれしかった	27 (4.04)
	b 感動した	1 (6.25)						
	e しみじみした	1 (6.25)						
	g 共感した	1 (6.25)						

TABLE 2-2 やりとり相手ごとの内容と感想(電子コミュニケーション送信分)

	f 同居家族		a ネット外の		b ネット上の		c MLなど	
	内容	件数 (%)	内容	件数 (%)	内容	件数 (%)	内容	件数 (%)
1	近況報告	6 (46.15)	近況報告	91 (38.40)	事務的連絡	73 (43.71)	とりとめない	76 (43.43)
2	事務的連絡	6 (46.15)	事務的連絡	85 (35.86)	とりとめない	51 (30.54)	気遣い・アドバイス	66 (37.71)
3	とりとめない	2 (15.38)	気遣い・アドバイス	64 (27.00)	気遣い・アドバイス	36 (21.56)	悩み事・グチ	20 (11.43)
4	悩み事・グチ	2 (15.38)	とりとめない	61 (25.74)	近況報告	33 (19.76)	事務的連絡	20 (11.43)
5	気遣い・アドバイス	2 (15.38)	悩み事・グチ	8 (3.38)	悩み事・グチ	8 (4.79)	近況報告	12 (6.86)

	f 同居家族		a ネット外の		b ネット上の		c MLなど	
	感想	件数 (%)	感想	件数 (%)	感想	件数 (%)	感想	件数 (%)
1	d スッキリした	5 (38.46)	c うれしかった	54 (22.78)	d スッキリした	55 (32.93)	o 特になんとも	43 (24.57)
2	n 心配になった	4 (30.77)	a 楽しかった	50 (21.10)	c うれしかった	41 (24.55)	d スッキリした	35 (20.00)
3	o 特になんとも	3 (23.08)	f ほっとした	47 (19.83)	a 楽しかった	28 (16.77)	g 共感した	34 (19.43)
4	f ほっとした	2 (15.38)	d スッキリした	46 (19.41)	f ほっとした	27 (16.17)	a 楽しかった	25 (14.29)
5	a 楽しかった	1 (7.69)	o 特になんとも	35 (14.77)	o 特になんとも	23 (13.77)	c うれしかった	16 (9.14)
	h つまらなかった	1 (7.69)						

- ・対面での会話：対面の会話では、どの相手との間でもとりとめのない会話が最も多かった。「悩み事やグチ」が、同居家族との間で最も多かったのはともかく、非同居の家族との会話よりも、むしろ母親・妻同士という共通項を持つ場合が多い家族や近隣の知人との間でより多く報告されたことは興味深い。
- ・電話での会話：電話でやりとりされる内容として圧倒的に多いのは、「事務的な連絡」であった。感想として「特になんとも」が多かったという結果はこの事実を反映したものである。また、特に家族とのやりとりで「ほっとした」という感想が多くみられた。

TABLE 2-3 やりとり相手ごとの内容と感想(対面会話)

	f 同居家族		a1 非同居の家族・親戚		a2 家族関係・近隣の知り合い		a3~a6 ネット外の知り合い	
	内容	件数 (%)	内容	件数 (%)	内容	件数 (%)	内容	件数 (%)
1	とりとめない	461 (56.56)	とりとめない	113 (60.43)	とりとめない	274 (46.13)	事務的連絡	116 (45.67)
2	近況報告	270 (33.13)	近況報告	82 (43.85)	近況報告	159 (26.77)	とりとめない	89 (35.04)
3	事務的連絡	119 (14.60)	事務的連絡	23 (12.30)	事務的連絡	158 (26.60)	近況報告	57 (22.44)
4	気遣い・アドバイス	89 (10.92)	気遣い・アドバイス	19 (10.16)	悩み事・グチ	71 (11.95)	気遣い・アドバイス	51 (20.08)
5	悩み事・グチ	56 (6.87)	悩み事・グチ	11 (5.88)	気遣い・アドバイス	48 (8.08)	悩み事・グチ	23 (9.06)

	f 同居家族		a1 非同居の家族・親戚		a2 家族関係・近隣の知り合い		a3~a6 ネット外の知り合い	
	感想	件数 (%)	感想	件数 (%)	感想	件数 (%)	感想	件数 (%)
1	a 楽しかった	280 (34.36)	a 楽しかった	65 (34.76)	a 楽しかった	252 (42.42)	a 楽しかった	102 (40.16)
2	o 特になんとも	176 (21.60)	o 特になんとも	50 (26.74)	o 特になんとも	94 (15.82)	o 特になんとも	56 (22.05)
3	f ほっとした	128 (15.71)	c うれしかった	30 (16.04)	g 共感した	90 (15.15)	c うれしかった	44 (17.32)
4	n 心配になった	114 (13.99)	f ほっとした	26 (13.90)	f ほっとした	85 (14.31)	g 共感した	37 (14.57)
5	c うれしかった	86 (10.55)	n 心配になった	24 (12.83)	c うれしかった	72 (12.12)	f ほっとした	24 (9.45)
							i 疲れた	24 (9.45)

TABLE 2-4 やりとり相手ごとの内容と感想(電話)

	f 同居家族		a1 非同居の家族・親戚		a2 家族関係・近隣の知り合い		a3~a6 ネット外の知り合い	
	内容	件数 (%)	内容	件数 (%)	内容	件数 (%)	内容	件数 (%)
1	事務的連絡	48 (66.67)	事務的連絡	58 (40.00)	事務的連絡	76 (59.38)	事務的連絡	83 (68.03)
2	気遣い・アドバイス	18 (25.00)	近況報告	50 (34.48)	近況報告	19 (14.84)	気遣い・アドバイス	27 (22.13)
3	近況報告	10 (13.89)	気遣い・アドバイス	36 (24.83)	気遣い・アドバイス	18 (14.06)	近況報告	23 (18.85)
4	とりとめない	8 (11.11)	とりとめない	31 (21.38)	とりとめない	16 (12.50)	とりとめない	13 (10.66)
5	悩み事・グチ	4 (5.56)	悩み事・グチ	12 (8.28)	とりとめない	14 (10.94)	悩み事・グチ	5 (4.10)

	f 同居家族		a1 非同居の家族・親戚		2 家族関係・近隣地域の知り合い		a3~a6 ネット外の知り合い	
	感想	件数 (%)	感想	件数 (%)	感想	件数 (%)	感想	件数 (%)
1	o 特になんとも	20 (27.78)	f ほっとした	37 (25.52)	o 特になんとも	38 (29.69)	o 特になんとも	32 (26.23)
2	f ほっとした	14 (19.44)	o 特になんとも	37 (25.52)	c うれしかった	28 (21.88)	c うれしかった	26 (21.31)
3	a 楽しかった	10 (13.89)	c うれしかった	30 (20.69)	f ほっとした	25 (19.53)	f ほっとした	24 (19.67)
4	n 心配になった	9 (12.50)	a 楽しかった	26 (17.93)	n 心配になった	13 (10.16)	a 楽しかった	17 (13.93)
5	c うれしかった	8 (11.11)	n 心配になった	11 (7.59)	a 楽しかった	12 (9.38)	d スッキリした	15 (12.30)

以上のような分析から、参加者たちが電子コミュニケーション、対面会話等を通じて行ったコミュニケーションそれぞれの特徴が明らかになった。どのメディアのやりとりにも、個人的な内容から事務的な連絡までさまざまな要素がふくまれており、それらのやりとりを通じて、参加者達はさまざまな、多くの場合肯定的な感情を経験している。また、ネットで知り合った相手との間でも心理的なやりとりがなされており、ネットが単なる情報源・連絡手段として利用されているだけではなく、対面コミュニケーションとも共通する交流の場として機能していることが示された。

3. 心に残ったやりとり

毎日の『日誌』では、一日のやりとりの中で最も心に残ったやりとりについても記録してもらった。心に残ったやりとりとして記録されたものを、メディア別に集計してみると FIGURE 2 のような構成になった。

対面での会話が心に残ったというケースが半数以上で最も多かった。電子メール等のネットコミュニケーションが心に残ったケースは全体の1割強であった。どの相手とのやりとりが心に残ったのか、という観点から分析を行ったところ、非同居の家族・親戚とのやりとり(77件)と、家族関係、近隣の知人とのやりとり(79件)がそれぞれ3割ほどで最も多かった。ネット上の知り合いとのやりとりの中で、最も多く心に残ったと記録されたのは、子育て関係の場を通じた知人(9件)であった。

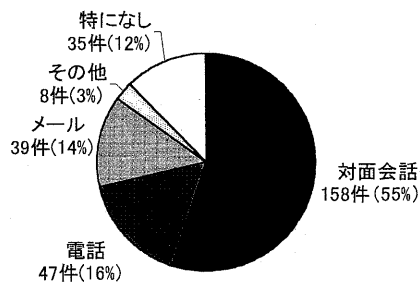


FIGURE 2 心に残ったやりとり

4. 日常生活のサイクルとネット利用

・一日の生活サイクルとネット利用

参加者たちが一日の生活の中でどのようにネットを利用しているのかを検討するために、『日誌』では、メールチェックの時刻、またメール以外にどのような活動をネット上で行ったのか、メールを書く時間等も含めネットに費やした時間の長さ、の3点についても尋ねた。

メールチェックについては、一日のメールチェックの平均回数は、平日平均 1.98 回(1.0~3.8回)、休日平均 1.60 回(1.0~3.5回)であった。各時刻に平均何人の人がメールチェックを行っていたかの分布を示したものが、FIGURE 3 である。夜 11 時前後にメールチェックをしている人が最も多いが、朝にも小さなピークがある。しかしそのピークも、子どもの登園等で忙しいであろう 8 時周辺を避けるように分布しており、日常生活のサイクルに合わせて電子コミュニケーションを行っている様子が見られる。

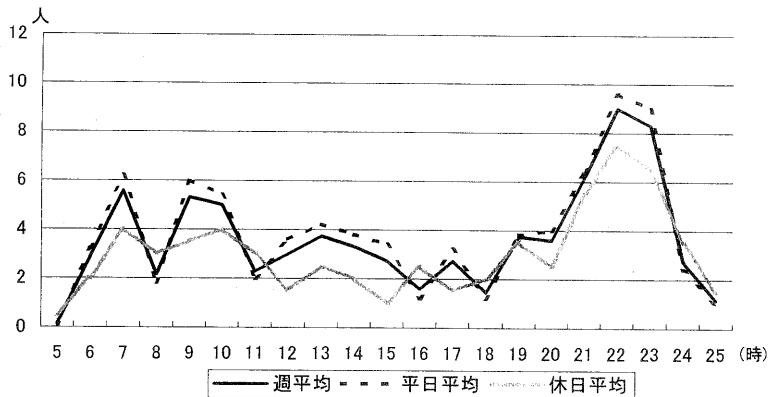


FIGURE 3 メールチェック時刻の分布(平均)

電子メール以外に、ネット上でどのような活動を行っていたかについて、最も多かったのは「フォーラム・会議室・掲示板等をのぞきに行く」で、週平均で60.8%の人が選択していた。また、次に多かったのは「お気に入りホームページの更新をチェックする」の38.2%であった。これに対し、「情報の検索」は16.0%と相対的に低かった。調査に参加した既婚女性の多くは、ネット上にそれぞれなじみのある場所を持っており、その場所を訪れることが一日のルーティンとして定着しているようである。

一日のうち、ネットコミュニケーションに費やした時間は、週平均で62.3分(10.0~218.7分)であった。平日平均は67.7分(13.0~270.0分)、休日平均は50.3分(0.0~120.0分)であった。平日の方が休日に比べ若干長かった。曜日による変化については次に詳しく検討する。

・一週間の生活サイクルとネット利用

ネットに費やした時間は、平日と休日とで多少異なっていた。この点をさらに検討するために、曜日ごとの変遷を検討した(Figure 4)。週末、特に日曜日に大きく減少している。

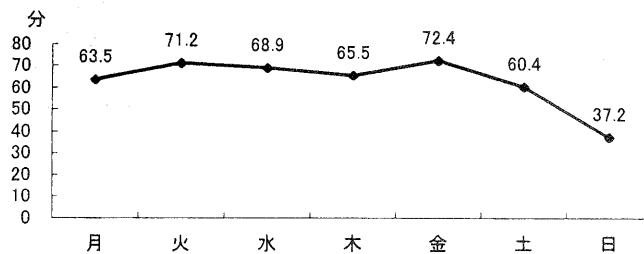


FIGURE 4 費やした時間 曜日ごとの変遷

週末にネットで費やされた時間が減少した理由について、さらに詳細に検討するため、電子コミュニケーション、対面会話、電話のやりとりの件数と相手の曜日ごとの変遷を検討した(Figure 5)。

電子コミュニケーションの全体件数は、送受信とも週末にかけ減少しており、費やされた時間が減少しているだけでなくやりとり自体も減少していることがわかる。一方対面会話では、全体のやりとり件数は一週間ほぼ一定であるが、家族・親戚との会話が休日にかけ増加していることがわかる。電話は、金曜日に家族・親戚とのやりとりが増加したのち、休日には減少している。多くの参加者にとって、週末は家族と過ごすための時間であり、相対的にネットコミュニケーションが減少している。ネットの利用やそれを通じたコミュニケーションは、家族とともに生活し、それを維持していかなければならないという制約や、家族との関係とのバランスの中で行なわれている。このような、家庭生活との両立という側面は、アクティブユーザー主婦を対象とした大谷(1999)の調査でも見出されている。

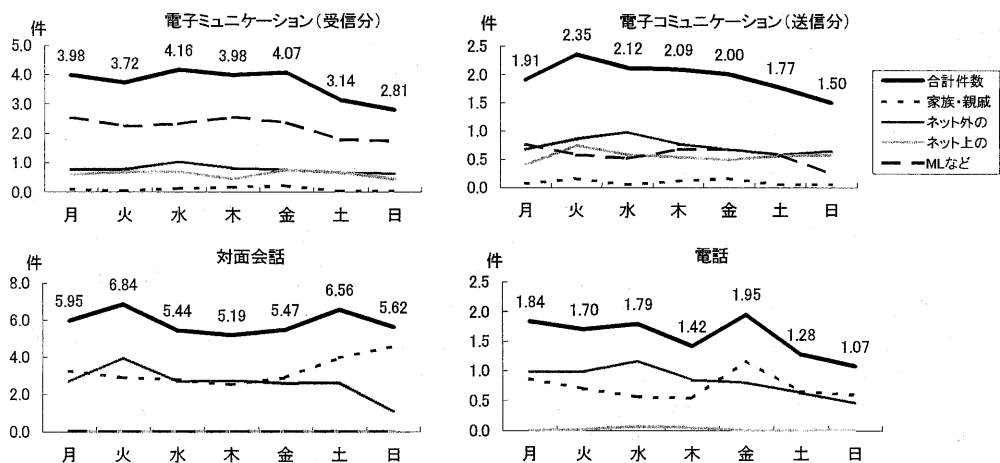


FIGURE 5 やりとり件数平均 曜日ごとの変遷

5. コミュニケーションの相手に対する親しさと連絡手段

『やりとり相手質問表』では、調査期間中にやりとりの合った相手一人一人について、通常「電話」「移動電話」「会う」「電子メール」「チャット」「FAX」の6つの連絡手段それぞれでどの程度の頻度連絡を取り合っているか(毎日のように～まだ1度きり、の7段階で評定)、また、連絡を取り合う頻度に関わらず相手に対してどの程度「親しさ」を感じているか(かなり親しい～まだ知り合ったばかり、の7段階で評定)を答えてもらった。これらの記録から、やりとりしている相手が本人にとってどの程度重要な人であるのか、またその重要な相手とどのような方法で連絡を取り合っているのかが明らかにすることができる。

家族以外で調査期間中にやりとりがあった相手の中で、参加者たちが最も親しさを感じている相手は、学生時代の友人であった。また、このタイプの相手との連絡手段として最も広範かつ頻繁に利用されているのは、電子メールであり、7割ほどと毎月のようにメールのやりとりをしていることも明らかになった。一方、これらの相手と対面で会う頻度は、平均すると年に何度かという程度であった。一方ネット上で知り合った相手の中で、最も親しみを感じているのは、子育て関係の場を通じた友人であった。このタイプの相手とは電子メールでやりとりするだけでなく、4割ほどとは実際に顔を合わせおり、ネット上での付き合いがネットの中だけで完結しているわけではないことが示された。

ネット外での知り合いと、ネット上で知り合った相手のそれぞれで、どのような交流のしかたをしているのだろうか?この点を検討するため、この2種類の相手それぞれについて連絡頻度と親しさとの関連を検討した(各連絡手段で連絡が無かった場合は「0」として計算した)。

家族・親戚を除く、ネット外での知り合いでは、「親しさ」は、すべての連絡手段の頻度と有意な相関がみられたが、電話の頻度との相関が最も高く($r=0.35, p<.01$)、次いで、会う($r=0.34, p<.01$)であり、電子メールの頻度との相関は、 $r=0.22(p<.01)$ であった。また、電子メールの頻度は、会う以外の連絡手段とは有意な正の相関があったのに対し($r=0.13\sim0.31, p<.01$)、会う頻度との間には負の相関がみられた($r=-0.31, p<.01$)。これらの相手との交流では、電子メールが会うことを補完している可能性が示された。

一方、ネット上で知り合った相手との関係では、当然のことながら多少異なった結果が得られている。これらの相手に対して感じている「親しさ」についても、全ての連絡手段の頻度との間に正の相関がみられたが、最も関連が強かったのは、電子メールでのやりとりの頻度($r=0.54, p<.01$)、次いで会う($r=0.51, p<.01$)、電話($r=0.45, p<.01$)であった。また、メールの頻度と、電話($r=0.26, p<.01$)や会う($r=0.19, p<.05$)頻度との間には有意な正の相関がみられた。ネット上で知り合った相手とは、電子メールでやりとりするだけでなく実際に会ったり電話をかけ合ったりといったネット外での交流を行っている。

6. ネットコミュニケーションの程度と人間関係

従来の研究では、ネットコミュニケーションの利用が人間関係にネガティブな影響を及ぼしていることが見出されている。今回の調査の参加者においても、そのような関係を示唆する証拠は見出せるのだろうか。ネットコミュニケーションの利用の程度と、『日誌』から明らかになったネット利用の程度（電子メールや発言の送受信の多さ・費やした時間）と、『アンケート』から得られた人間関係に関するいくつかの指標（孤独感得点、夫・親友・母親との間のソーシャルサポート得点）との関連とを検討した。

分析の結果、孤独感の高さは、ネットコミュニケーションの活発さ（送信数、受信数、合計数）、費やした時間（平日平均、休日平均、週平均）のいずれとも有意な相関がなかった。一方、ソーシャルサポート得点と、これらのネットコミュニケーションの程度に関する指標のうち、夫との間のソーシャルサポート得点と送信数との間に有意な負の相関が見出された ($r=-0.42, p<.01$)。一方、孤独感とソーシャルサポートとの関連に関しては、夫とのソーシャルサポート得点 ($r=0.45, p<.01$)、親友とのソーシャルサポート得点 ($r=0.47, p<.01$) との間で有意な負の相関がみられた。

以上のように、少なくとも今回の調査に参加した既婚女性に関しては、ネットコミュニケーションを活発に行ったり、ネットコミュニケーションに時間を費やしていることと、心理的な孤独感の高さとの間には関連は見出せなかった。しかしその一方で、夫との間のソーシャルサポートと、メールなどの送信数との間に負の関連がみられていることから、夫という最も近い人物との間のサポートを、ネットコミュニケーションが何らかの形で補っている可能性が示唆された。

IV まとめ

調査の結果、既婚女性という利用者層においては、ネット内、ネット外の人間関係は相手や内容という点で連続しており、ネットを通じて全く異なった世界を楽しんでいるというよりは、もともとの生活との連続性を保ち人間関係を維持しつつ広げるものとして利用されていること、家事・育児や家族とのコミュニケーション等、家庭生活との両立を考慮しつつなされていることが明らかになった。このようなインターネットをもともとの生活に組み込む形での利用形態の存在は、ネットの内と外という2分法が明らかに不充分であることを示している。また、このような連続性が保たれた範囲での利用では、利用の程度と孤独感というネガティブな心理的要因との間に関連がみられなかったという結果は、活発なネット利用が、かならずしもネガティブな心理的状态とは結びつくわけではなく、「どのように」利用されたのかという要因が何らかの形で影響を与えている可能性を示唆している。インターネット利用の心理的・精神的影響を議論する際には、利用の「量」だけでなく、「質」についても検討する必要がある。

(引用文献)

- Kraut, R., Patterson, M., Lundmark, V., Kiesler, S., Mukopadhyay, T., & Scherlis, W. (1998). Internet Paradox: A social technology that reduces social involvement and psychological well-being?, *American Psychologist*, September, 1017-1031.
- Mantovani, G. (1996) *New communication environments: From everyday to virtual*, London, UK: Taylor & Francis
- 落合良行(1983). 孤独感の累計半別尺度(LSO)の作成, *教育心理学研究*, Vol. 31, 332-336.
- 大谷裕子, 佐久間路子, 戸田まり, 新垣紀子, 野島久雄, 無藤 隆(1999). インターネットアクティブ主婦のメディア利用状況と人間関係, *信学技報* (ヒューマン情報処理研究会 1999年5月)
- Russell, D., Peplau, L. & Cutrona, C. (1980). The revised UCLA Loneliness Scale: Concurrent and discriminant validity evidence, *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 472-480.
- 佐久間路子, 大谷裕子, 新垣紀子, 野島久雄, 無藤 隆 (1999). 女子大学生・主婦のメディア利用状況と人間関係, *信学技報* (ヒューマン情報処理研究会 1999年5月)
- 嶋 信宏(1991). 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究, *教育心理学研究*, 39, 440-447.
- 郵政省 (1999). 平成 11 年版通信白書, ぎょうせい, 東京